

web 検索における検索誘導性忘却

村木 一

現在、インターネットの成長に伴う情報量の増加によって情報検索の困難さが指摘されている。web 検索支援をするには、検索アルゴリズムの改良等の工学的アプローチ、もしくはユーザ自身の検索スキルを向上させる教育的アプローチが必要である。後者では、メタ認知活動を促すといった検索支援研究が盛んである。例えば、web 検索でユーザが一つのクエリに集中してしまい、その周辺情報を検索しないまま終わってしまう、という例がある。このようなユーザに対してメタ認知を促すことによって、自身の検索状態を認識させ、検索スキルを向上させることができる。

しかし、多くのメタ認知的アプローチは、ユーザにメタ認知を促すのが支援の中心であり、検索を行うユーザが自分の検索状態を把握できない原因は明らかになっていない。

本研究では、この原因に検索誘導性忘却が関与しているのではないかと考えた。検索誘導性忘却とは、脳内の記憶情報において、思い出している周辺の情報ほど思い出しにくくなる、という現象であり、生起原因や解除方法も研究されている。この現象が web 検索において、ユーザ自身の検索状態の認識を阻害しているのではないかと考える。

そこで本研究では、web 検索において検索誘導性忘却が生起するかどうか検証することを目的とする。これにより、ユーザの検索状態の認識を深めることができ、より適切な情報検索支援が可能になると考えられる。

本研究では、web 検索時に検索誘導性忘却が起こるかどうかの検証実験を行った。対象者は、筑波大学の大学生 10 名(男 6 名, 女 4 名)である。本実験は、事前学習、確認テスト、web 検索、再生テストの順で行い、実験終了後に参加者へのインタビューを行った。学習に使用した単語は地球温暖化、選挙問題の 2 つのカテゴリから各 5 語ずつである。これらの単語を web 検索に使用した単語、web 検索と同じカテゴリだが検索には使用していない単語、web 検索に使用していない別カテゴリの単語の 3 つに分類する。この 3 つの単語群に対する正答率の変化を分散分析することで検索誘導性忘却の生起を検証する。

実験の結果、3 つの単語群の成績には統計的に有意な差は見られなかった。これは、今回の実験では検索誘導性忘却にあたる現象が確認できなかったことを意味する。しかし実験後のインタビューにおいて、「web 検索で行った単語が再生テストで真っ先に浮かんだ」、「web 検索で行ったカテゴリの単語よりも web 検索で行わなかった単語のほうが思い出しやすかった」といったコメントが得られた。これらのコメントは web 検索でも検索誘導性忘却が生起する可能性を示唆している。

今後の課題としては、より適切な単語群の決定と web 検索課題の組み合わせの検討が挙げられる。

(指導教員 松村敦)